

浄土

1985-9

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日 漢検者 (特別授承認雜誌) 第三五号
昭和六十年八月二十五日印刷 昭和六十年九月一日発行

第五十一卷

九月号





九月の秀句

母を呼ぶ娘や高原の秋澄みて
草心ひくく鳴きある虫もあり
名月や宵すぐるまの心せき

高浜 虚子
星野 立子
飯田 蛇笏

九月号



——の相に各々(おのおの)八万四千
の光明あり。

——『観無量寿経』真身観文

目次

法 話

精進っていいことなの……………長谷川 岱 潤……(2)

<ずいそう>

車の運転とお念仏……………北 山 良 祐……(14)

<連載> 一紙小消息 ②

一念十念の念仏でも往生できる……………村 瀬 秀 雄……(8)

み仏とともに = 6 =

——鬼になった母——……………安 居 香 山 ……(18)

<ナムナム童話> (2)

ナムナムさんのおはぎ……………ぬのむらてつや……(24)

河西回廊の秋

「五大石窟の旅」旅日記(弐)……………木 下 隆 一……(29)

◇◇長篇連載小説◇◇

立ち止まるな善導 第15回……………寺 内 大 吉……(35)

枯れ葉がまねく

挿絵 松濤 達文

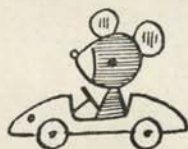
表紙 小林治郎 画

カット 大正大学美術部

(法)

(話)

精進っていいことなの



夏休みが明けてすぐのころのことでした。敵しかった残暑を証明するかのように、真っ黒顔のこども達が校庭でいつものように飛び回っています。しかしこの日ばかりは、いつもとちょっと様子が違って、仲良し三人組の

正裕君、彰夫君が鉄棒の前で、功弥君を怒っているようです。

「おまえ、休み中に逆上がり出来るようになるって約束したじゃないか、こんなものむずかしくもなんともないんだぜ、僕なんか一回

はせがわ
たい
じゆん
長谷川 岱潤
(東京・品川区戒法寺住職)

で出来ちゃったよ、ちょっと練習すれば出来るようになるのに、なんでしなかったんだよ」と、正裕君が責め立てます。

「そうだよ、僕だって始めは出来なかったけど、何度も練習したら出来るようになったんだぜ、おまえだってあきらめないで何度だってやれば出来るようになるさ、みてやるからやってみろよ」と、彰夫君が励ましています。

それから何分たったでしょうか。

「おまえ、蹴りあげる力がまるでないじゃないか、やる気あるのかよ」と、彰夫君がどなりだしました。

「こいつ元々力ないんだよ、かわいそうじゃないか」と、今度は正裕君が功弥君をかばっています、さんざん親切に教えてあげていた彰夫君のいかりはおさまりそうにありません。

「彰夫、おれ達は帰ろうぜ、功弥、またよく先生に見てもらうんだな」

「正裕、なんだよそれじゃおれの教え方が悪いというのかよ、もういいよ、今日は一人で帰る」

彰夫君はふりふり怒って帰ってしまいました。

私は職員室の窓からしばらくこの様子を何とはなく見ていましたが、残された二人のところにいくことにしました。

「どうしたんだ功弥」

順々に今までのいきさつを話してくれました。自分のために彰夫君がいっしょうけんめい教えてくれたこと、それなのに自分が出来なくて、彰夫君を怒らせてしまい、なおかつ正裕君とまでけんかさせてしまったことを、自分が悪くて、自分が悪くて、自分が悪くてと自分を責め立てながら話すのです。

「そうかよくわかったよ、それじゃ彰夫君のためにも『逆上がり』出来るようにがんばろうじゃないか、出来るようになって彰夫君にお礼言わなくっちゃね」

それから何度も何度も、功弥君の「逆上がり」の練習が始まりました。そして、功弥君の問題は足の力ではなく、腕の力であることがわかりました。しかし、その日はとうとう出来ませんでした。

私はこれから毎日腕立て伏せを十回ずつ、一日二回朝と晩に行なうように言いました。

数日がたちました。功弥君はときどき「逆上がり」に挑戦していましたが、やはり出来ませんでした。彰夫君は功弥君をあざ笑うようになりました。正裕君はときどき口をにかけているようですが、功弥君との中は離れていくばかりでした。そしてそういう私も、「もっと努力しなくちゃだめじゃないか」という言葉を口の中で飲み込む毎日でした。

そして功弥君の姿が、鉄棒の前からぜんぜん見えなくなったある日、私は今までの思いを爆発させるように、功弥君を呼んで言いました。

「あんなに仲良しだった三人組が、今では口

もきかなくなったのは一体誰のせいなの、君の努力が足らなかったからじゃないのか、人と同じに努力しても出来なければその倍、それでもだめならその倍、出来るまで努力しなくちゃだめじゃないか、」逆上がり「くらい克服しなくちゃ、この先どんなつらいことが待っているかわからないよ、がんばらなくっちゃだめじゃないか、こんなことでくじけたら、君は本当にだめ人間になってしまふよ」と言ってから、最後の一言は余計だったと思いました。が後のまつりでした。

その晩、心配になって功弥君の家へ電話をしてみました。案の定、おかあさんから功弥君は家へ帰ってくるなり泣いていると聞かされました。そしてもうひとつ、ショッキングなことを聞かされました。功弥君は小さいとき病氣して、腕の力がそうとう劣っているとのことでした。本人はそのことを大変気にして、努力を人一倍しているのですが、結果にはすぐ結びつかないことも、本人が一番よ

く知っているとのことでした。

私はこの時、『努力』という言葉の恐ろしさをしみじみ考えたのです。

右の話を教師にしている友人から聞かされたとき、私は仏教が説く処の「精進」とは何かということを考えざるをえませんでした。

御存知のとおり、春、秋の一年で最も氣候のいいこの時に、春分、秋分の日を中心にして一週間、日本人は「お彼岸」と名づけ、御先祖の御供養をいたすと共に、心の修養週間として仏道の実践を積み、文字どおり彼岸（理想なる世界）である悟りへ、一步一步近づくべく修養を積むことをめざしてききました。そしてその積むべく仏道が、大乘仏教の最も基本となる「六波羅蜜の行」であることを御存知のお方も多いことでしょう。

六波羅蜜の行とは、

一、布施—喜んで与える心

二、持戒—規律あるしあわせを喜ぶ心

三、忍辱—じつとがまんし待つ心

四、精進—目標に向っての正しい努力

五、禪定—身、口、心を統一すること

六、智慧—真実を見極める力

の六つです。そして私が問題にした「精進」は、この四番目に位置しているのです。

この六波羅蜜の理解の仕方としましては、二つ二つをペアとして理解していく方法があります。つまり、布施と持戒、忍辱と精進、禪定と智慧というペアになるわけです。そこで問題の忍辱と精進のペアで考えてみましょう。精進とは、正しい目標に向った正しい努力と解されます。しかしそうした正しい努力というものは、なかなか結果に結びつかない。だから忍辱、つまりじつと結果が出るまで耐え、そして待つことだと教えているようです。仏教では過程と結果を分けて考えることをせず、結果さえよければ何をしてしまわないという考え方はしません。むしろ過程を大事に考えるのです。見る側としては、結

果の出る出ないを問題とするのではなく、その努力そのものの正しさ、良さを評価すること、そして努力する側にとっては、結果の出ないことに惑わされず、あせらずじっと待つて正しい努力を続けること、これが忍辱・精進の意味だと教えているようです。

しかし、これでも努力奨励主義に変わりありません。これではまだ三人組のこども達の悲劇、教師の悲劇に答えられません。みんな努力することを促しただけです。彰夫君は、自分が出来なかったことが努力して出来るようになったのです。この喜びを功弥君にも味あわせたかったことでしょう。正裕君は自分自身あまり努力していないので、てももあり努力せよとはあまり言わないかわり、功弥君のことに同情できています。しかし教師はこれから先のことを考え、自分に負けないよう努力することを精一杯勧め、とうとう言わないでいいことまで言ってしまうました。努力することが正しければみんな正しいのです。し

かし、功弥君もみんなも傷ついてしまったのです。何故でしょう。

精進っていいことなのでしょう。

私は六波羅蜜の解釈の仕方にもう一つあるように思います。それは、最後の智慧を別格として、全体の頭と最後におき、全体にかかるとしします。つまり智慧に基いて以下の五つを行じ、その行によって更に智慧が完成されていくと考えます。そして後の五つは、禪定の上に精進をおき、精進の上に忍辱を、忍辱の上に持戒を、そして全ての先に布施をおくと考えます。

そうなりますと、精進は四番目、一番大事なものは布施となります。そこで布施とはなんだったでしょう。喜んで与える心でしたね、喜んで与えるとはどういうことでしょう。人に何かをしてあげたとき、人から感謝の言葉を期待することの逆ですね。何かをしてあげて、それが本当に相手のためになったとき、私にさせてくれてありがとうと思うこと、つ

まり徹底的に相手を認め、相手のことを考えてあげること、そしてそれが仏の智慧に基くとき、それが布施となるのです。

小学校の三人組も教師も、そのことを忘れていたのです。努力よりも大事なことがあるということ、つまり相手の側になつて、相手といっしょに考えるということ。でもなかなかできません。ではどうすればいいのでしょうか。簡単です、精進がなければ何一つ成就しないには確かですが、相手かまわずの思い上った努力主義を説かないことです。

心を静めて行動をおこし、努力すれば待つことを覚え、待つことによつて自分を戒めることを知る、そして何よりも、相手を認め、相手をゆるし、相手に対する愛をもつことを、仏さまの智慧を学ぶことをとうして実践する。これが六波羅蜜の行であり、お彼岸の行だと思ふのです。

長田芳一画 五雨みなこ文

絵本 ほうねんさま

B 6変型判／定価三〇〇円

右近れい子画 福嶋智誉編

絵本 おじぞうさま

B 6判／七二頁／定価四〇〇円

◎ 仏教まんが・教育図書

— 多数発行 —

大 道 社

〒102 東京都千代田区飯田橋二―一―一六

電話(〇三)三六二―五九四四

振替(東京) 一一八三四七

一紙小消息

②

一念十念の念仏でも往生できる



村瀬秀雄
むら せ ひで お

「行すくなしとても疑うべからず。一念十念に足りぬべし」

この句の意味は、たとえ唱えた念仏の数が少なかった者でも極楽往生を疑ってはならないということである。何故なら一声十声の念仏しか唱えなかった者でも往生できるからである。

無量寿経には一声と十声との二通りの念仏

が説かれている。阿弥陀仏は念仏往生の本願をたてて、十声の念仏を唱えた者も必ず往生させると誓い給うている。それなのに釈尊は一声の念仏を唱えた者でも往生できたと説き給うている。どうしてこのように二通りに説かれているのであろうか。また十声と一声とでは念仏の数が違っているのであるから、功德の面からいっても違いがあるのでなからう

か。ある人がこのような疑問を法然上人に尋ねたところ、上人は答えて仰せられた。

「十声の念仏といい、一声の念仏とも説かれてゐるのは、何れも臨終を迎えた時に初めて念仏を唱えたことをいうのである。臨終に十声の念仏を唱えた者も往生できるとし、一声の念仏を唱えた者も往生できるということである。何れにしても往生できるのであるから、一声の念仏が十声の念仏より功德があるということはないのである」(念仏往生要義問答)

僅か十声一声の念仏で往生できたのは、臨終の時に唱えた念仏であるからであるまいか。そうすると平生の念仏と臨終の念仏とは功德が違ふように思われる。事実また臨終に唱えた一声の念仏は百年の行より勝るといわれていたのである。このような疑問を持っていた者に、上人は答えて仰せられた。

「臨終の念仏と平生の念仏との功德は同じである。臨終の念仏といっても平生の念仏と

どこに違いがあるであらうか。平生から唱えている念仏も、いざ寿命を終る時には臨終の念仏となる。臨終のつもりで唱えた念仏も、そのまま病気が治れば平生の念仏となる」

(同上)

臨終の時の念仏の功德について教えを受けても、どうも他人ごとのように思えてしまふ。それにしても十声一声の念仏では余りにも少い数であるために、もう一つはつきりしない氣持が残る。そのためについ本当であらうかと疑うことになってしまう。証賢はこのような氣持の者に答えていった。

「そのような疑いは、恐らく多くの人が持つてゐることであらう。それというのも仏が愚かな凡夫のために本願をたて給うたということに十分に承知してゐないために、そのような小賢しい考えを起すのであらう。阿弥陀仏はすでに十声の念仏しか唱えられなかつた者であっても往生させると誓ひ給うてゐるのである。そしてその本願を成就し給うて

いるのであるから、どうして往生できないことがあろうか。そのようなことを考えずに念仏の声を本願に任せて、南無阿彌陀仏と唱えられていればよいのである。法然上人は大胡太郎実秀につかわされた手紙の中で

『誰でも煩惱が多いか少ないかを気にすることなく、罪業が浅いか深いかを考えなくてよいのである。ただ南無阿彌陀仏と唱えて、その声によって必ず往生できると信じていないてはならない』

と仰せられている。上人のお言葉の意味は往生したいと願って初めて南無阿彌陀仏と一声唱えたとすれば、一声の念仏を唱えた者でも必ず往生させると誓い給うた本願に叶うということである。続けて十声の念仏を唱えた者を往生させるという本願に叶うのである。そして生涯を通じて念仏を相続すれば、一声念仏を唱えた者を往生させるという本願に叶うのである。だから、われらが無造作に唱えている念仏であっても、仏は一声の念仏とい

えども聞き洩らし給うことがない」(帰命本願鈔)

十声にしろ一声にしろ、念仏の数のことに拘泥することが間違っているのである。例えば観無量寿経に、三種の善行を一日または七日にわたって修行すれば極楽往生ができると説かれているが、この一日または七日という日数について善導大師は、生涯から一念までのことであるとして次のように説いている。

「一日または七日にわたって修行するといふことは、修行する日時の長い短いを説いているのである。長ければ生涯を通して修行することであり、短かければ一日、一時間、一念までをいうのである。あるいはまた一念や十念から一時間に及び、更に一日から生涯を通して修行することである。要するに一たび発心して修行を始めたならば、生涯を通して誓って退くことなく、極楽往生をとげるまで修行を続けるのである」(観経散善義)

一声十声の念仏でも往生できるという経文

を深く信じて、念仏さえ唱えていればよいのである。念仏の数の多い少ないによって往生を疑うことはないのである。法然上人の一声十声の念仏でも往生させるといふ仏の慈悲を嬉しく思うならば、やがては百万遍までも唱えることになるとして、次のように仰せられた。

「たとえ一念十念の念仏でも往生できるのである。一念十念の念仏でも往生できると思う嬉しさから、やがて百万遍の功徳を重ねるのである」(或人のもとへつかはす御返事。勅修御伝第二十三)

百万遍の念仏は、阿弥陀経に七日にわたって一心不乱に念仏を唱えれば仏の来迎を蒙って往生できると説かれていることによるのである。法然上人は百万遍の念仏を唱えるのに七日でできなければ八日、九日と日数を延ばしてもよいと仰せられている。それはそれとしてわれわれがどのように心掛けたならば、念仏を相続していることになるであろうか。

それは一回の食事の間に三回ほど思い出して唱えるのがよいとして、法然上人は次のように仰せられた。

「善導大師は十声一声の念仏で極楽往生ができる」と信じていながら、常に忘れることなく念仏を相続して唱えるようにと教えている。また大師は別のところでも念仏を相続して唱えるようにと説いているので、念仏は次々に断え間なく唱えなければならぬ。凡そ一回の食事の間に三度ほど思い出して唱えれば、好ましい念仏の相続ということができる。このように常に思い出して唱えれば、一日に十萬六萬の念仏を唱えなくても相続していることになる。しかし人の心はその時に見たり聞いたりすることに移り変わるので、何んとなく用事に紛れて思い出して唱えることが難しくなる。そこで毎日唱える念仏の数を多くに決め、手に数珠を持っていれば、忘れずに念仏を唱えることができる」(同上)

努め励んで念仏を唱えているつもりでも、

いつの間にか他のことを考えていたり、何かを眺めたりしていたことに気がつく。しかし妄念を混えて唱えていても、念仏の功德には変りがないとして、法然上人は次のように仰せられた。

「念仏はよく黄金に喩えられている。黄金は火で焼いても美しく輝き、水に入れても損われることがない。それと同じように念仏を唱えていて妄念が起きたにしても、妄念によって念仏の功德が汚されることなく、念仏を唱えながら言葉を交したにしても、念仏の功德が紛れることがない。このように心得ていても余所事を混えずに念仏を唱え、今少し数多くの念仏を唱えるように心掛けることが望ましい。もしこのような考えを忘れて、つい言葉を交した時などに、情けないことに今の念仏は無駄になったと考えることは決してあつてはならない。念仏はいかようにして唱えても、極楽往生できる行であることに相違ないのである」(同上)

それにもう一つ大切なことは、健康で暮している今日一日を大切にすることである。もし今は一日を励まずに無為に過したとすれば、それだけ寿命を縮めたことになる。經典に次のように説かれている。

「人には健康な今日においてこそ、努力すれば何んなりと行うことができる筈である。それにも拘らず何故に俗事をすてて、努めて美を修めようとしないのであるか。何故に精進して苦の世界から抜け出すことを願わないのであるか。もし浄土に往生することができれば、浄土において永遠の生命が得られるというのに、どうして道を求めようとしないのであるか。慢然とその日その日を暮らしているだけでは、やがて迫り来る老いと死とが待っているだけであつて、何も期待できるものがないというのに、日々の生活や老後にどのような楽しみがあるというのであろうか」(無量寿經)

この積尊の教えに従って明日とはいわず今

日から励んで念仏を唱えなくてはならない。
法然上人は食事をしている時でも念仏を唱えなくてはならないとして、次のように仰せられた。

「人の命は食事にむせて死なないとも限らない。南無阿弥陀仏と嚙み、南無阿弥陀仏と呑み込むようにしなくてはならない」(常に仰せられける御詞。勅修御伝第二十一)

諸行無常は世の常であって、今日が無事であつても、明日の無事を保証できるものはない。いついかなることに会つても、驚かないためには、いつ死んでもよいと覚悟をきめて念仏を唱えるのである。二祖鎮西上人は毎日の生活は念死念仏であるとして、次のようにいつている。

「息を吐いたからといって、息が吸えるとは限らず、息を吸ったからといって、息が吐けるとは限らない。助け給え阿弥陀仏。南無阿弥陀仏」(勅修御伝第四十六)

(くくく)

村瀬 秀雄 著

|| 好評新刷 ||

三部仮名
鈔の全訳

『念 仏 の 要 諦』

B 6 判 二九七頁 価一九〇〇円

|| 好評 ||

『和 訳 浄 土 三 部 經』

B 6 判 四七四頁 価二五〇〇円

『和 訳 選 択 集』

B 6 判 三八七頁 価二五〇〇円

『和 訳 觀 經 四 帖 疏』

B 6 判 五八四頁 価三五〇〇円

『和 訳 六 時 礼 讃』

B 6 判 二六五頁 価二四〇〇円

『全 訳 勅 修 御 伝』

B 6 判 八四七頁 価六八〇〇円

取扱い 法然上人鑽仰会

(す)
(い)
(そ)
(う)

車の運転とお念仏



きた
北山良祐
やま りょう ゆう

(焼津市光心寺住職)

丁度、還暦を迎えた年、フトしたことから車に乗ることとなった。その年齢まで車は私とは無縁のものと思つて、全く見向きもしなかった。還暦を迎えて、自動車学校に通うようになるなんて、些か狂い咲きの感がないでもない。それが、いろいろの事情Ⅱご縁で乗るように仕向けられるようになった。時機相応ということであろうか。もう車に乗り始めて六年を経ている。然し正直いって、今以て、車と私とが一体になり得て運転できない状況である。遠出の時は、殆んど息子が運転して連れて行ってくれている。だから、ますます技量は上達しない。然しまた、そのお陰で、初心忘るべからず、ではないが、自ら運転する時は、マークこそつけていないが、初心者運転である。

そんな折に、いろいろな思いが頭にチラつく。

最近、お念仏の意が、車を運転する時、強く胸にひびいてくる。年齢かなと思うことである。

“只、一向に念仏すべし”

と元祖さまが仰せられていても、仲々に念仏申されぬ私である。口癖にお念仏は出るが、ご本願を、しっかりと受けとつてのお念仏ではないようだ。職掌柄故の口グセ念仏である。

どんなに運転の法則を知っていても、実際は余り知らない、簡単な操作の理屈を知っているに過ぎない。車は法則通りに動いてはくれない。法則を知らなくとも、法則に叶った運転をすれば、車はその如く自在に動く、当然のことだ。だが、その当然のことに、運転の初期には、みんな苦労したことである。目下の私の運転は、その連続である。バックは今以って、思い通りにいかない。特に狭い所でのバックでは、いろいろな事に思いが乱れて、隣の車にあててはいけない、うしろの壁にブチアテてもいけない、冬でも汗をかきかき前進・後進―キリカヘシ―をするが、一向に向きが変わってくれない。ために狭いところでの方向変換は苦手である。

“只、一向に念仏すべし”

とは雑務の気配りを減らすことが大切だ。本当は動中静・静中動の境涯にならねばいけないが、と苦勞の挙句、やっと狭いところから自らの車を出し得た時、ホーッとしながら、お念仏の意も、こんな事かなと思うのである。

唱うれば吾も仏もなかりけり

南無阿弥陀仏の声のみぞして

というお歌を想い出しながら、私と車を一体となれた時、車は自在に動くことが出来るのだ。そして、むずかしい狭い所での方向変換もなし得て―それでも、その時、ホットする気持ちを以て、他のもろもろのものに障りなくてよかったという思いで―その場を立ち去ることである。正しくお歌の意そのままである。

然し、お歌の詠者の心境は、更に深められて、

唱うれで吾も仏もなかりけり

南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏

となつていかれたのである。

運転する者、自在に運転し得て、走り去る時、駐車させていただいたその場に「置かせていただいてありがとうございます」の念が生じた時、その車の運転者は、後のお歌の心境に近づいたと違うだろうか。

自分自身が、その場におったならば、立ち去る時「失礼しました」「ご厄介になりました」「お邪魔しました」と挨拶するであろうように、人車一体の走法の状況は、そこまではないと本当ではないと思うのである。

「南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏」の心境でなく、「南無阿弥陀仏」の声のみぞして「の技倆満点であつても、心得はそこまで昇華しない運転者が殆んどではないだろうか。

他人ごとではない、自分の事に話を戻そう。

さて、お念仏の意は、丁度、運転と全く同じように思えてならない。

お念仏する気になるとは、正しく運転する気になって、お念仏申すその事は、運転免許証を取得したということと合致する。

自在に運転できるとは、人車一体になり得て運転するところまでいった状況である。

だから、時期相応、ということでも車を運転する気が生じないと、いくら車に自ら運転して乗りたいと思っても乗れない。そして、乗る気になったら、まず自動車学校に行つてケイコすることである。と同様に、お念仏が大切だと思つたら、

「只、一向に念仏すべし」

と元祖さまが起請文でお勧め下さっているのであるから、一枚起請文を読むかぎりの人はお念仏が大切だと知るのだから。

それならば、まず、念仏することである。そこで、お念仏の学校であるお寺へ行くことである。そして、そこでお念仏のケイコをすべきである。即ち、進んでお寺の念仏会なり、特殊の所で開鑑されるお別時に参じて、お念仏に励むことである。

そうして、大車一体の状況になり得て、自在に運転できるよう、まず、お念仏の中の自分になることが大切であろう。そこまでいき得た時お歌の、「南無阿弥陀の声のみぞして」の状況ではないだろうか。そして、その立居振舞が人をして、その人の信仰に合掌される様になった時、正しくそれは、「南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏」のお歌の心境にまで昇華したものと違ふだろうか。

そうなりたものだ。所詮、煩惱多い私には生涯かけても不可能のことだが。と昨今のお念仏にかわる私の状況を、同様に未熟な車を運転しながら思う此の頃ではある。

み仏とともに

=6=

—鬼になつた母—



やす い こう さん
安 居 香 山

(大正大学教授・文博)

日が暮れて、三ッ谷の村が闇につつまれた頃、父は私を迎えにきた。母や、二カ月前に別れた姉や兄たちに会えるのを楽しみに、私は、胸をはずませて、わが家に帰った。

その頃のわが家は、茅ぶきの粗末な田舎屋で、台所と言えば十燭ほどのはだか電球がついているだけの、暗い部屋であった。そして、畳のあるのは仏壇のある座敷だけで、台所は板の間にむしろを敷いたものであった。そこで家族の者は、各自のお膳を並べて食事をしていた。

笑顔で迎えてくれるとばかり思っていた母は、鬼のようにこわい顔であった。姉や兄たちは、下を向いたまま黙っていた。そして私は、あたかも犯罪人のように、こうした家族の前に、荒むしろの上に坐らされていた。父も黙ったまま、そこに坐っていた。何とも言えぬ沈痛な空気が、台所中に充満していた。

その時、闇のしじまを破るように、語気荒い母の低い声が、私に伝わってきた。

「伊三郎、なぜ帰ってきたのか。おまえさんは、出家をした身です。もうこの家の子ではありません。一

度出家をして、家を出た子は、二度とこの家に帰ることは許しません」

それはなんと、恐ろしい、鋭い言葉であつたであらう



晩年の母

か。笑顔をもって迎えてくれると思つた母は、あたかも鬼のようなこわい顔をして、きつと私をみすえた。そして、更に母は、父の方を向いて、

「父さん、明日、夜の明けぬ内に、この子を連れて、京都に行つて下さい。寺に連れて帰るのです」

と、強く言つた。姉や兄たちは、シクシク泣きだしたが、母は涙一つ流さず、父にもこうきっぱりと言ひ放つた。再び沈痛な静けさが、台所を流れた。

その後、どのような経緯があつたか、これ以上覚えていない。翌朝夜が明けぬ前に叩き起された私は、父に連れられて、稲枝駅へと、暗い田舎道を歩いていった。しかし、鬼のように見えた母が余程こわかつたのか、父に連れられるままに稲枝から汽車に乗り、再び京都の阿弥陀寺へと帰つて行つた。

しかし、事態は一変していた。寺に帰った所、住職は、再び寺に入ることを許さなかった。父とのやり取りで、どうしたことがあったかは、教えられなかったが、荷物をまとめて、寺を出るしか仕方がなかった。

父は遂方に暮れたことと思う。行く目当てもなく、いつしか百万遍の交差点にきていた。父はよく百万遍の本山にお詣りしていたので、自然と寺町から、この方向に足が向いたのではないだろうか。百万遍の交差点にただずんだ父は、しばらく考え事をしていた。そしてやおら私に向って、

「おまえ、死ぬ気があるか」

とたずねた。小学校四年生の私に、こんなことを語りかけてきた父は、余程、遂方に暮れたに違いない。小さい私にも、この時の父の気持ちだが、よく理解できたのである。私は、即座に、

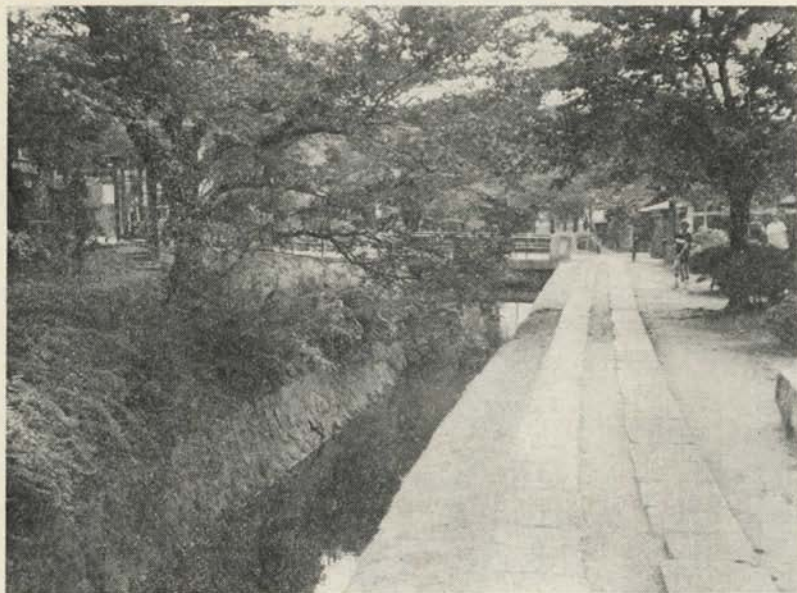
「死んでもいいよ」

と答えた。その時の状況は、今もよく覚えていいる。私も、鬼のようになった母に見離され、生きることへの望みを失っていたのであろうか。それとも、父に言われるままに、軽く返事をしたのであろうか。その心理状態までは分らぬながら、この時の印象は、強く私の脳裡に残っている。

丁度、交差点の向い側におでん屋があり、その看板に、真赤な蛸が描かれていた。ひょうきんな顔で、八本の足をおどらせている絵であった。私はこの絵を、印象深く覚えていいる。そして、これがこの世の見おさめになる絵かななどとも考えていた。

それから父は、私の手を引いて、百万遍から銀閣寺の方へと歩いて行き、やがて疎水に出た。疎水は六月頃ということもあって、水を満々とたたえて流れていた。二人は、その流れを見ながら、土手沿いに歩いていった。この時、果して父は、本当にこの疎水に入水することを考えていたのであろうか。多分、そんな考えもあったに違いないと思われるが、終に私は、このことを父の在世中に聞く機会がなかった。

どれ程、この疎水の土手を歩いたか、私自身ははっきり



——京都の疎水——

り覚えていないが、ふと立ち止った父は、

「ここだ」

と大きく叫んだ。土手添いの一軒の家を見つけたのである。これがなんと、上田純明先生の家であった。そして、私の生涯は、この上田先生との出会いによって、大きく転換することになるのである。

○

話はとんで、昭和十八年、戦雲急を上げ、全国の大学生は、東条内閣のもと、学徒出陣の路線を歩んだ。私もその一人として、代々木原頭で出陣の閲兵式を行った。戦時教育を徹底して受けた私は、祖国のために命を捧げる決意を、この時した。

滋賀県に本籍を持つ私は、故郷の三ッ谷から出征し、敦賀の連隊に入隊することになった。私は、小さい時三ッ谷を出てから、二十二歳になるまで、時に一、二日田舎に帰ることはあったが、父母達と親しく生活する機会がなかった。

出征した暁には、或いは戦死することも覚悟をしていた。それだけに、是非、出征前に父母達と生活をしておきたいと考え、師匠の許しをえて、出征前の一カ月間程を、田舎で過した。出征は十二月の初めごろであったと思う。

田舎は丁度稲の取り入れの時期であった。今と違って、一株ずつ稲を刈って束にし、稲こき機械で籾をとる作業があった。何人手があってもよかった。兄は昭和十六年の九月から、中国へ出征したきりでいなかった。それだけに、父母達は、よい助け人がきたと喜んでくれた。

両親の膝もとを永く離れていた私は、実の父母を、「父さん」「母さん」と呼ぶことができなかった。何か他人のおじさんのようであった。この時も、果して「父さん」「母さん」と言えたかどうか覚えていない。多分呼べないで、適当に声をかけていたのではなからうか。

いよいよ出征も近くなった或る日、母が、

「今夜は一緒に寝ないかね」

と声をかけてきてびっくりした。二十二歳にもなった私は、はずかしくて、終にこの要求はみたさなかったように覚えている。その時、母は二、三枚のハガキを出してきて私に見せた。なんとそれは、私が十歳の時、阿弥陀寺から父母に宛てて出したハガキであった。そこには、たどたどしい字で、

「早く迎えにきてくれ。いやになった」

というようなことが書いてあった。母はそのハガキを、十数年間も大切に保存していたのである。そして、私が京都に行き、二カ月もたたぬ内に帰った時、すぐ家から追い出してしまったことについて、私に詫びた。

「あの時は、すまなかったね。おまえを京都に追い出してからは、三日三晩、布団に頭を突っ込んで、泣いていたんだよ。よく我慢をして、頑張ってくれたね」

私はびっくりした。寧ろ私があやまるべきであるの

に、なんと勿体ないことであらうか。あの時、母が鬼になつてくれなかつたら、この私はどうなっていたか分らない。

私は思わず母の手を取つて、感謝の涙をさめざめと流した。そして、今更のように、母のあり難さに、胸をしめつけられた。

この事があつて、私は「母に捧ぐ」という一文を、原稿用紙二十枚程に書き、今までの思い出と、母へのお礼を綴つて、密封した。

「私が戦死したら、読んで下さい」

そう母に話して、出征の前日に渡した。これはその後、戦争も終つて私が帰つてきた時、母は私に返してくれて、いま私の手元にある。母は、私が出征すると、すぐあけて読んだということであつた。

(つづく)

◇“浄土句集” 欄投稿要項

多くの方々のご投句をお待ちしております。お仲間の方々も広くお誘い合わせ、一句でも多く投句して下さい。大本山善導寺のご法主でもあられます一田牛畝先生に選者をお願いしておりますので、ふるつて作句して下さい。

一 ハガキ一葉に四、五句づつ、あるいは封書に何句でもお書き下さい。

一 投稿先――

。千839―11 久留米市善導寺町飯田550

大本山善導寺 一田牛畝先生宛

。千812 福岡市博多区中呉服町10―14

正定寺 一田牛畝先生宛

。千102 東京都千代田区飯田橋1―11―6

法然上人讃仰会

ナムナム童話 (2)

ナムナムさんのおはぎ

ぬ・の・む・ら・て・つ・や

おかあさんが だいどころでコトコトとなにかつくっています。

ふーんと あまいにおい。

となりのへやで 本をよんでいた かよちゃんはおくんとつばをのみこみました。

だって おかあさんのつくるものは なんでもおいしいんですもの。

それに おかあさんは かよちゃんがたべたいとおもっているものを とてもよくしっています。カレーライスがたべたいとおもう

と カレーライスをつくってくれるのです。

おやつにアイスクリームがたべたいなあとおもって ようちえんからかえってくると

アイスクリームが れいぞうこにあるのです。おかあさんには かよちゃんがおもっていることが ぜんぶわかっていのでしょう。

ですから いま おかあさんがつくっているものも かよちゃんがたべたいとおもっているものではないでしょうか。

「いまたべたいとおもっているもの なにか

なあー。うーん ほしぶどうの入ったビスケットかな”

そうおもいながら だいどころへとんで行って 目をつぶったまま

”おかあさんのつくっているもの あててみようか”

といたいのを じつとがまんしています。

「はーい おまちどうさま。かよちゃんのだいすきなものよ。」

といって おかあさんが にこにこわらいながら入ってくることをおもうと つばが またゴクンゴクンです。

”まだかなあー”

”なにかなああー”

カチャカチャと おさらのおとがします。

ホークでしようか おはしでしようか お盆の上にのせています。

さあ いよいよかよちゃんの目のまえに出

てくるばんです。

「さあ できたわ。」

おかあさんの声といっしょに こっちへくる足おとがします。

もう どきどきです。

おかあさんがお盆をもって入ってきました。

「わあー 早くたべたあーい。」

かよちゃんが 手をだしたのに おかあさんは ”まだまだ” といいいながら まえをとおりすぎていきます。

おやおや どこへもって行くのでしょうか。

おとうさんは まだ会社からかえっていませんし おにいさんも おねえさんも学校です。

ほかにたべる人はいないはずですよ。まさかおかあさんが ひとりでたべるはずはありません。

やがて おとなりのへやから チーンチーンというおとがしました。

そうでした。

おかあさんは おぶつだんのほとけさまに
おそなえたのです。

かよちゃんが まいにちナムナムといって
おがんでいるナムナムさんのほとけさまに
いちばんさいしょにあげたのです。

「さあ かよちゃんも おがんでちょうだい。
きょうは あきのおひがんだから おはぎを
つくったのよ。おじいちゃんや おばあちゃ
んにたべてもらおうとおもってね。おまいり
をしたら おだいどころへいらっしやい。」
そういうと おかあさんは 行ってしま
いました。

ところが かよちゃんは おまいりしよ
うとしないのです。立ちあがろうともしません。
だって いちばんさいしょにくれるとおも
っていたおはぎを おかあさんは ナムナム
のほとけさまにあげてしまったんです。

「わたしと ナムナムさんと どっちがたい
せつなんだろう。」

かよちゃんは ぶつぶついつています。

「それに ナムナムさんは たべられるはず
がないわ。手はうごかないんだし あんな小
さな口では おはぎが入るはずがないもの。」
ひとりごとをいいながら おなかはグウグ
ウ。おさらの上のおはぎが 目のまえにうか
びます。あんこのと ごまのと きなこのお
はぎです。

「うーん くやしい。わたしのをナムナムさ
んがさきどりしてしまった。よーし もしも
ナムナムさんがたべてなかったら わたしが
ぜんぶたべてしまうから。」

立ちあがると かよちゃんは おぶつだん
のまえへ。

いいにおいがします。

「チーンとならしておがめば おじいちゃ

んや おばあちゃんは もうたべられるんだから わたしもいっしょに たべてしまおうつと。」

そういつて かねをならそうとした かよちゃんがおさらの上をみて びっくりぎょうてん。

さっき おかあさんがおそなえたおはぎが たべかけになっているではありませんか。まわりには だれもいません。

いったい だれがたべたのでしょうか。

かよちゃんは 目をこすつて おぶつだんの中をよくみました。

なにかが みえます。

ナムナムさんのまえにだれかがいるのです。

「あれ あれは おじいちゃんと おばあちゃんだわ。」

そして にこにこわっているおじいちゃんと おばあちゃんのそばに もうひとり女

のこ。

だれだろうとおもつて よくみると これは おどろいた！。

小さいときの かわいいかよちゃんではありませんか。

おじいちゃんと おばあちゃんが かわりばんこに かよちゃんの口へ おはぎをいれてくれているのです。

「こんどは ごまのがいいかな。」

「つぎは きなのがいいね。」

小さなかよちゃんは こっくりこっくりしながら 小さな口にすこしづつたべさせてもらっているのです。

そのようすを 目をほそくしてみている

おじいちゃんと おばあちゃん。でも じぶんたちは ぜんぜんたべようとしません。

ぜんぶ小さなかよちゃんに たべさせてくれるつもりなのでしょう。

おはぎののこりが すくなくなってきたので しんばいになったかよちゃんが

「おじいちゃんやおばあちゃんも たべて。」

といって かねをチーンとならしました。

たちまち おじいちゃんとおばあちゃん

そして小さなかよちゃんのすがたはきえて

そこには ナムナムのほとけさまと おはぎだけです。

あんこのおはぎも ごまのも きなこのも すこしもへっていません。

おかあさんが おそなえしたときのまま。

「かよちゃん おまいりがすんだら こっちへいらっしやい。」

おかあさんが よんでいます。

かよちゃんが「はーい」といいながら だいどころへいきました。

「ほとけさまに おまいりしてくれてありがとう。おじいちゃんも おばあちゃんも よ

ろこんでくれたでしよう。」

「そうなの。とつても うれしそうだつたわ。

わたしも たべさせてもらっちゃっ——。」

といいかけて かよちゃんは 口のまわりをふきました。

「おまちどうさま。」

おかあさんが おはぎをおさらにのせてもってきました。

「さあ たくさんたべていいわよ。」

そういわれたかよちゃんですが なんだかおなががいっぱいみたいなのです。

「どうしたの さつきは あんなにたべたいたべたいって いったのに。」

「そうなんだけれど みんなでたべたくなっちゃったの。おとうさんも おかあさんも

おにいさんも おねえさんとも いっしょにたべたいの。それに ナムナムさんのおじい

ちゃんと おばあちゃんともね。」（おわり）

河西回廊の秋

「五大石窟の旅」旅日記（五）

— 敦煌（その二） —



木きの
下した
隆りゅう
一いち

（隨筆家）

初めて、私が飛天に魅せられたのはいつの頃であったか——電装を纏った女人の飛天だったから、少なくとも隋朝以後の飛天像であったに違いないが、いつどこでそれを目にしたのか、全く覚えていないのである。

六年前の二月、「インド・ネパール仏跡の旅」というツアーで、佐藤密雄博士や大学の先生方と一緒にさせて頂いた時、オーランガバードやエローラの石窟に彫られていた飛天像やアジャンタの窟内の壁面に描かれていた飛天を見て以来、私の飛天熱は一層高まったと言っているだろう。オーランガバード石窟の飛天は稚拙で鈍重な感じだったが、エローラのそれは体も細目に彫られていて、スピー



——大泉河橋上より下流を望む。中央は鳴沙山——

ド感を表していた。「年代的には、こちらの方が新しい」と教えて下さったのはどなただったか……。暑苦しくて眠れぬままにベッドで輾転反側しながら、私はそんなことを思い返していた。

あの旅の後半は、飛天ばかりを探し求めて歩いた。と言っても、飛天に関してどれ程の知識が私にあったわけではない。憧れだったのである。少年の、片想いの心情とでも言ったら判って頂けるだろうか。

古来、洋の東西を問わず、人間は自由に空中を飛びたいという願望を持っていた。中国では、土俗信仰の集合体ともいえる道教の神仙思想となり、西欧では、有翼の天使となって定着した。インドでは、アレキサンダーの遠征軍がもたらしたギリシャ美術が原始仏教と結びついて、裸身有翼の飛天を生んだ。

「今は昔、天狗有けり」という、今昔物語の天狗の概念はこれだろうか。要するに、天使や飛天は天界と人間界を結んで、神仏の教

えを仲介する者、過去と現在、現在と未来の間を自由に往来して、人間界に幸せを運ぶ者として具象化されたもので、人それぞれの心の産物と言ってもいいだろう。こう考えてゆくと、日本各地に残る羽衣伝説も、竹取物語のかぐや姫も、亦、飛天の変型と見て差支えないのではないだろうか。仏教美術に於ける飛天は、ただ単に絵の空間を埋めるという装飾的な役割だけで、飛翔し、天楽を奏し、散華をしているわけではなく、主題を強調し高めるために描かれているように思えてならない。敦煌の莫高窟は、飛天の宝庫と言われている。一体どのくらいの数の飛天が窟内の天井や壁面に描かれているのであろうか。楽しみであると同時に、「我々のような一介の観光客には、肝心なところは見せて貰えんのでは……」と言った、藤原さんの言葉が頭の中をよぎる。見せて貰えなくてもいい、莫高窟なるものを目にするだけで満足しようと——私は思うと、急に眠気がさして来た。

目が覚めたのは五時頃だった。頭が重く、体調は思わしくない。むしろ昨日より悪いくらいである。それでも夜明けの空気を吸いに外へ出てみる。完全に夜が明けきっていないのに、賓館の前の道路は、もうかなりの人通りである。勤めに出かけるのか、自転車の人、徒歩の人。野菜や果物を満載した荷車が行き交っている。全般に中国の人たちの朝は早い、と思うのは、我々が夜型になりすぎているからで、これが人間本来の健全な姿なのかも知れない。五分程で部屋に戻り、熟睡中の藤原さんの眠りを妨げぬよう心して、女房と娘に手紙を書く。(この手紙、航空便にも拘らず、私の帰国後、三日目に配達された)

この日は割合朝がゆっくりだった。莫高窟へ出発したのは九時前後であつたかと思う。昨日来た安敦公路を逆に辿り、飛行場の手前で右折する。分岐点には莫高窟の一般公開時間を記した白い碑が立っている。量二量分はありそうである。暴風飛砂に耐えて立つ沙漠の案内板は、これくらい頑丈でなければ役に立たないに違いない。舗装が切れた道の両側には忽ちゴビが拡がる。左に聳える祁連山脈

の支脈三危山と、右に台地を成している鳴沙山との狭間に溜まった砂礫の原である。砂塵を上げて、バスは時速八十キロ以上のスピードで猛然と突っ走る。

点々とゴビに浮かぶ円錐状の砂礫の盛り上がりは墓である。天辺から裾に向けて放射状に石積みが伸び、この縦糸を綴るように、裾から天辺に向かって五段程、石積みがぐるりと同心円状に取り巻いて、がんじがらめに墓を縛りつけている。暴風から墓を守るための知恵であろう。新しい墓には華やかな紙製の花束が供えられている。

「土饅頭、じゃないなあ」

と呟くと、隣に坐っていた大学院生のM君が事も無げに言った。

「ゴビ饅頭、ゴビ饅頭ですよ」

言われてみれば、それ以外に呼びようのない砂礫の原の墓であった。

莫高窟は敦煌の町から南東へ、直線距離にして約二十五キロメートルのところにある。三危山と鳴沙山の間を流れる大泉河の左岸、東面する鳴沙山の絶壁に穿たれた石窟群の総称で、千仏洞と呼ばれた時代もある。中国独特の白髪三千丈的な表現方法とも思えるが、なにしろ四世紀から十四世紀にかけて開鑿され、現在整理されているものだけでも四百九十二窟を数えるというから、千仏洞というのも、それ程大袈裟な呼び方ではないかも知れない。或る日突然、砂の中からひょっこり姿を現す窟があっても、ちっとも不思議はないのである。

バスは水の涸れた大泉河を右に見ながら、莫高窟へ向かう。ここまでの所要時間は約二十五分。大泉河の対岸はボブラその他雑多な喬木の緑地帯で、更にその向こうに、朝の日に輝く鳴沙山の絶壁と、重厚な莫高窟の楼閣が見えて来る。写真では見馴れた景色だが、目のあたりにすると、やはり感激しないではられない。はるばると来つものかな——胸の奥がジーンと熱くなる。

大泉河に架かった白い橋を渡る。新しい橋である。橋のたもとには、山と積み上げてメロンを売っている。中国人はメロンや西瓜の類を実によく食べる。ゴミ箱に果皮箱とか果売箱と書いてあるのは、そのせただろうか。土堤で乏しい草を食んでいるのは、メロンの荷車を引いて来た驢馬か。ブルドーザーが河床を掘り返している。集めた砂はどう始末するのだろうか。二層の楼門の横を抜けて、敦煌文物研究所の前を過ぎ、「莫高窟」という扁額の掛かった小さな楼門（これが正規の入口のようである）の前を左折して、二百メートル程行ったところでバスは停った。南大仏と呼ばれている第三百三十窟の傍で、すでに二台の観光バスが停っていて、外国人の団体専用の通用口らしい金網の門が開いている。

ここへ連れて来られたことは、むしろ私にとっては幸いであった。莫高窟で唯一の岩を彫って造られた、全長二十六メートルの弥勒様に最初にお会い出来るのであるから。またこの大仏様は、莫高窟で撮影を許されている唯一の被写体でもあった。我々はそのまますっと大仏様の足元まで行けたが、以前は約三メートルの階段を降りて行かねばならなかったという。それだけ鳴沙山の砂が降り注いで堆積していたのである。掘ってみると、上から清、宋、唐の順で瓦や焼けただれた木片が出土し、ここに観仏楼があったことを示していると、何かで読んだ記憶がある。狭い窟内に在します大仏様は、私の安物のカメラにおさまるはずはなく、部分的に何カットか撮って、帰ってから合成してみたが、全容を写し切っていなかった。とにかく大きいのである。あの大きな奈良東大寺の大仏様が十六メートルであるから、その巨大さが判ろうというものである。だが、これに驚いてはいられない。唐の高宗の皇后であった則天武后が造営した北大仏は、なんと三十三メートルもあるというのである。この北大仏、いまは七層の楼閣に覆われているが、後世何度となく行われた修復によって、見る影もない醜悪なものになってしまったとも、則天武后の権勢を憎んだ工人たちが怠業していい加減に造ったの

で、もともとそんなに出来はよくなかったとも伝えられている。なんにしる、何もご存知ない仏様にはお気の毒としか言いようが無い。

残念なことに、ここでフィルムを切らしてしまつて。賓館を出る時、予備のフィルムを上着のポケットに入れておいたのだが、つい暑さに負けて、脱ぎ捨てて来た。「しまった」と思ったが、後の祭りであつた。窟内の撮影は駄目でも、窟の外観は写せるはずなのに。……やはり、どこか狂つていた。南大仏のお顔を拝するには、更に二層の楼を上って行かねばならない。第百三十窟の横の絶壁に、急な階段が刻まれている。粗い粒子の砂や小石が固つた、脆い礫岩の階段である。階段の壁に手をつきながら、二、三段上ると、ボロッと壁面から剥げた石がこぼれ落ちた。拾い上げると、小指の先程の白濁した小石であつた。

全身に籠る虚脱感と膝の痛みから、私は石階を上るのをやめて、バスに戻るべく金網の通用門を潜つた。ところが、場所を移したらしく、バスはどこにもいない。多分文物研究所の前の広場あたりへ行つたのだからと見当をつけて、蹣跚とした足どりで歩く。酔歩蹣跚というのなら、原因が判っているから諦めもつくが、風邪の後遺症と高血圧症という自己診断以外原因が考えられないから、余計もどかしく感じる。この時程、体力の衰えをうとましく思つたことは無かつた。

(続く)

◇ 写仏と青山善光寺戒壇めぐり ◇

●日時 昭和六十年九月二十八日(土) 午後二時～四時

●会場 青山善光寺(八地下鉄銀座線・千代田線・半蔵門線)表参道駅下車徒歩一分◇

●講演 「仏の心とかたち」 大正大学教授 石上善應先生 ●冥加料 二〇〇〇円(当日会場にて受け付けます)◇

※問い合わせ 株式会社文化書院(〇三―二六一―〇四七九)◇

立ち止まるな善導

〈16〉

寺内大告

挿絵・松満達文

枯れ葉がまねく

十

長安化度寺の無尽藏院については「太平広記」が次のように実状を伝えている。

——武徳中、有沙門信義、習禪以三階、

為業。于化度寺置無尽藏。貞觀之後、

捨施錢帛金玉積集不可勝計。常使此僧

監、当分為三分。一分供養天下伽藍增修之備。一分以施天下饑餓悲田之苦。一分以充供養無碍。士女礼懺閤咽捨於、争次不得、更有述。車載錢絹、捨而棄去、不知姓名。

無尽藏院は武徳年中（六一八—六二六）に三階教団の始祖信行禪師の弟子沙門信義が設置



したものだという。貞観の年時（六二七—六四九）になると、長安の士女は先を争って金銭や絹布などを寄進した。姓名すら告げずに立ち去った。どれだけの財貨が集積しているのか、すでに計算しきれなくなった。

この財貨の配分先もきちんと三つに分けられていた。各地の伽藍の修理費、飢饉難民への救済、それと無碍、見送りを期待しない供養とであった。

まさしく始祖信行禪師の悲願達成を目的として発足した無尽蔵院である。信行はその在世中、弟子の僧邕（五四三—六三一）が白鹿山の深林へ隠棲したとき、これを叱って次のような檄文を寄せて招き出している。「道を修め行を立てんには、よろしく済度を以て先と為すべし」と。隠遁孤絶の仏教をきびしく批判したのである。信行自身が路上に立って坂を登る重い車の後押しをしたことは、すでに紹介した。

ところで中国仏教で労働の尊さが強調され

はじめたのは、この信行禪師らが出現した六世紀中葉あたりからだったと言われる。当然のことながら労働を尊ばなければ衆生救済も手ぬるいものとなってくる。

じつは労働、それも宗教者がこれにかかわることはインド仏制できびしく禁ぜられていたのである。聖者なるがゆえに大衆の汗にまみれた世界へ混入してゆくことが許されなかった。部派仏教（小乗）は現在もなおこの仏制を遵奉していると言える。

中国禪宗の五祖弘忍和尚（六〇一—六七四）はその法嗣の印可を与える折、迷ったようである。伝説は和尚が黄梅山にいて、門下に仏法の核心を詠んだ詩賦の提示を求めた、という経緯を語っている。

門下の俊英、最上座の神秀はこれにこたえて「身は是れ菩提樹、心は明鏡の台の如し。時時に勤めて払拭して、塵埃を有らしむることなかれ」と廊下の壁に大書した。みんなは感服した。ところが翌日、この詩賦の横に余

り上手でない文字が書きつけられてあった。
「菩提もとより樹なし。明鏡もまた台なし、
仏性はつねに清浄なり。いづくにか塵埃あら
ん」——人間皆悉有仏性を強調した反論であ
った。

弘忍和尚はこの脇書の作者を求め、深夜ひ
そかに彼を訪れて禪宗六祖の印可を与えたと
いう。

その作者とは「碓を踏むこと八箇余日」無
学文盲の恵（慧）能大師であった。無学文盲
の彼は米搗き小屋で働いていたが、壁の詩句
が気になって仲間の童子に読んでもらった。
その誤まりを正す詩賦をついでに書き添えて
もらっただけなのである。

当然、後世に潤色された伝説と思われる
が、一門の秀才よりも米搗き坊主の行実践を
重んじた中国禪家の進路を明快に指示してい
る。

この恵能大師（六三八—七一三）より一世紀
半ほどおそく現れた孫弟子の臨済義玄。彼の

日常には師の黄檗希運とともども勤勞の汗がべ
つとりとしみついている。良价洞山（八〇七
—八六九）が師臨済を語る逸話集「洞山録」
にこんな断片がある。

——師（臨済）ちなみに普請する次第で、巡
察し去って一僧の普請に赴かざるを見る。師
問う。你、何ぞ去らざる。僧云く。某は不安
なり。師云く。你尋常健なる時、何ぞ曾て去
来せん。

普請とは共同作業のことである。ある日、
臨済は畑仕事へ出かけようとすると、禪院
のなかを巡察した。一人の僧がやすんでいる
のを見かけた。

「お前は どうして ゆかないのか」

「わたしは 病氣なんです」

「病氣なのか……しかしお前はふだん健康な
ときだって、かつて一度も畑仕事へ出かけた
ことがないではないか」

唐代の禪院が勤勞をいかに重要視したかわかる。しかもその勤勞を、ただの生産手段とは考えず汗の結晶のなかに禪機を探ぐりあてようとしている。

臨濟義玄は師の黄檗希運と畑仕事に出かけた。黄檗は臨濟が手ぶらであることに気づいて、

「歟はどこへ失くした」と咎めた。

「誰かが持っていきました」

「此方へ来い。お前に聞きたい(商量せん)ことがある」

黄檗は歟を大地へ突き立てて言った。

「よく見ろ。この歟は天下の誰もが引き抜くことはできない。拈援不起だ」

ところが臨濟はいとも無造作にその歟を引き抜いてしまった。

「おかしいですな。私の手裏に握られているではありませんか」

黄檗はにっこりと笑って、

「今日は誰かが良い仕事(普請)をしてくれたぞ」

満足げに僧院へ帰っていった。

「臨濟録」にあるこの記載を、黄檗と同門の潯山靈祐はその弟子、仰山惠寂に語りかける文体で注釈する。

「歟は黄檗の手裏にあったのに、なぜ臨濟の手へ移ったか、わかるか」

師の問いに弟子の仰山はユーモラスに答えている。

「泥棒は下司ながら悪智慧では君子をしのぎますよ」

黄檗和尚の「深智」よりも臨濟禪師の「行動」の方が役者が一枚上、という意味であろう。

山間や深林で発展した禪宗は勤勞——普請の作務を重要な宗教実践としたが、都会で教線を拡大した三階教団や善導の浄土教は市民大衆が相手だった。彼らの経済生活や家庭環境のなかへ肌理(きめ)こまかく浸透していっ

た。善導自身の場合、前にもふれたが、

——既に京都に入り、広く此の化を行す。

弥陀經数万卷を写す。士女の奉ずる者、その数は無量。

と「続高僧伝」が書くように善導は「阿弥陀經」を書写しては、長安の街で出会う人々にわかし与えたのだった。その数は十万巻に及んだと言われる。現存する稀少な古写本の「阿弥陀經」の末尾に「善導」と朱字で署名されたものがあり、この写經配布が造作伝説ではなかったことを裏付けている。

十一

「貴郎は此処で無尽蔵院へ出入りする人間を見張っているのですね」

と善導は化度寺脇の新邸に、王徐明をその朝訪ねると、おだやかな口調で聞いただし

た。

「それが私の役目なのです。三階教団の不正は摘発されなければならない」

「その不正とは？」

「教団が政庁の要人に金品を贈賄して、被護や利益を期待する行為です」

「すでに何かを掴みましたか」

「それはお答えできませんが、私が此処にこうしている事実が……」

王徐明は役人らしく慎重な態度を崩さなかった。

「貴郎の仕事に深く立ち入るつもりは全くありません。ただ、その仕事を継続するについて、昔のあの枯れ葉を思い出してくれませんか」

「枯れ葉？」

「柿の葉にせつせと文章を書いたことですよ」

「また何かを書きますか」

「柿の葉でなくとも結構です。私が上質な紙

を運びましょう。貴郎の心魂をこめた麗筆で
経典を写して欲しいのです」

「経典ですか。それはどんな内容で？」

「大経です。無量寿経を、毎日少しづつでも
いいから書写して下さい」

そこで善導は大経の内容を諄々と王徐明に
語って聞かせた。

「なぜ、その写経をやらねばならないのです
か」

「貴郎は役目で、いま真寂の宗徒（三階教徒）
に法剣の刃をあてようとしています。法剣は
人間で定めた規則であります。間違いが無い
とは言えません。あやまって純粹な仏徒を糾
弾する場合もあり得ます。裁く者、裁かれる
者、どちらにとってもこれは不幸な事態で
す。しかし、これが生きる人間の現実です。
あやまちを犯さねば人間は生きることさえで
きないかもしれません。だから阿弥陀仏の慈
悲にすがるので。貴郎も現在の役目をやり
ぬく以上は、この慈悲にたのまねばなりませ

ん。毎日、欠かさずに写経をすることです」

「わかりました。紙ならば、役所に幾らでも
ございます。わざわざお運び頂く必要はあり
ません」

しかし善導は強く頭を振った。

「いや、私は貴郎の写経のために写経紙を此
処へ運んでくる義務があります。それもまた
阿弥陀仏の慈悲に少しでも近づきたいからで
す。私はその紙を手に入れるためにかかわっ
た人々が、ひとりでも多く仏の慈悲を浴する
ことになるでしょう」

「紙を入手するためにかかわった人々、とは
どういう意味ですか」

「商売をするのです。それを買ってくれた人
です」

「禪師が商売をするんですって、いったい
何を売るのですか」

「さよう、貴郎にもたいへん関係の深かった
品ですよ。實際寺の庭に成っている柿です」

「あんな方柿が売れるんですか。だいいち今

☆☆

自絶往生



の季節に実が成っていますか」

「夏成りの木が十五、六本はあります。爪ぐらいの大きさになっています」

たしかに柿は浅からぬ因縁があった。その柿れ葉が現在の王徐明を創る端緒となった。

「でも夏成りは渋いでしょ」

「うまく食べる方法があるのです」

善導は悪戯っ子のように笑った。

王徐明は胸で何度もうなずいた。

こんな天真爛漫な笑顔をひるげられる人が信じている阿弥陀仏の慈悲とは、全く間違いない仏法なのであらう。写経を励行しよう。

實際寺へ戻った善導は俄かに忙しくなる。

庭前の渋柿を、もぎ始めた。桑の葉を集めてきて煮こんだ。その葉液を冷やし、塩を加えた。柿の実を頭の部分まで漬けこんで二晩おいた。

この渋抜き法は江南の各地で実施される古くからのやり方だった。会稽山中の鹿苑寺は

それが名物になっている、と明末の詩人張岱は書いている。

美味な甘柿が出来る、善導はその朝、西京の市場へ出かけていった。朝市は相変わらずごったがえしていた。

善導は顔馴染みになった肉屋の店先に立った。いつも此処で写経紙を配ったり、説法をするのである。

店先とは言っても掘っ立て小屋の前に戸板を並べただけである。戸板の上には血のしたたる豚や羊肉が盛りあがっている。掘っ立て小屋の軒には皮を剥いだだけの獣肉が丸ごと吊るしてあった。

「坊さん、その籠は何だね」

豚そっくりの顔をした肉屋のおやじがいぶかしげに善導がかついできた籠を覗きこんだ。

「御覧のとおり柿だよ。此処で売らしてもらう」

「坊さんが商しないをするのかね」

「悪いかな」

「うちの商売の邪魔をしなけりゃあな」

「肉を食べたあと、この柿を食べれば口の中

がさっぱりする」

「なるほど肉と抱き合わせか。そんならい

や。いつもみたいに、こんな生き血をすする

みたいな生ま肉を食ってるから地獄へ落ちる

んだ、なぞと説法をやられるよりはいい。そ

れで、幾らで売るんだ」

「柿三個で紙一枚」

「紙一枚だと。金は取らないのか」

「麻紙か藤紙、そのどちらもない人からは一

枚を買える分だけのお金をもらう」

「いやに紙にこだわるな。そんなに沢山、何

に使うんだね」

「経文を写す」

「だって坊さん、いつも沢山写してきて、み

んなに配ってるじゃあないか」

「これからは多勢の人に写させるんだ」

奇妙な対称だった。豚そっくりの顔をした

肉屋のおやじと、眉目秀麗、透きとおった肌の若い僧とが並んで道行く人に呼びかけている。

「脂の乗りきった夜叉母もあるぞ。噛むほどに味が泌みてくる羊狼の火肉もあるぞ」

「方柿は如何かな。三個で麻紙一枚」

兩人の声は入り乱れる。でもやはりおやじ

の胴間声が声量、音調ともに善導のそれを圧

倒し去る。となると若い美僧も肉屋の手代か

と間違えられてしまう。

「あんた、ほんとに坊さまなの」

と笑いかけてくる女性もいた。

「はい。この方柿を一つ……」

「ほんとの坊さまなら、その籠を全部、買ってあげるわよ」

「麻紙が十八枚になります」

と善導は籠の中味をあわてて数えなおし

た。

「そのかわり、うちまで届けて頂戴」

笑った眼もとに洎るんだ色彩が混じりこ

む。誘惑の意志歴然だ。この美僧の肉をとことん食べ尽そうとする。

それと気づいた肉屋のおやじ。よだれを吸いあげながら年増女へすり寄ってゆく。

「奥さん、わしの花和尚はどうかね。奥さんの食べごろだと思いがね」

善導にはまるで見当のつかない陰語だ。

「何言ってるのよ。あたしはこれでも未だ孫二娘なんだよ。そんな花和尚なんか、くわえられるもんかい」

花和尚とは巨根の意味か。孫二娘はびちびちした小娘である。それはともかく善導などの近より難い世界であった。

この肉屋のおやじは「京」という姓だった、と伝誌は告げる。志磐の「往生惡輩伝」によれば、

——長安の京姓、もと屠を為す。善導和上の人に念仏を勧むるによつて満城、肉を絶つ。

つまり善導の清淨念仏が長安城にひろがり、善男善女たちは誰も肉を口にしなくなつたという。みんなが精進潔斎を心がけたのである。

ために肉屋「京」は上がった。善導を逆か恨みして、暮花善導の居所へ押し入ってきた。殺そうと企んだが、かえって諄々と淨教を語られ、たちまち悔いあらため戸外へ駆け出て、念仏しつつ高樹に登りつめ、そこから飛び降りて死んだという。長安の人々はこの夜、阿弥陀仏が童子たちを引きつれて、「京」が登った高樹の空へ来迎し給うお姿を目撃したと語っている。

ここでも自絶往生の伝説へ吸収されてしまふが、前にもふれたように「京」が善導の説法を正確に聴聞していたらそんな行動には走らなかったであろう。現に別の記述は「京」が終生変らぬ善導の側近となつて、かげひなたなく師に仕えた記事で結んでいる。

十二

善導が毎日届ける麻紙藤紙にせつせと「無量寿經」を写経し、私心利慾を拭ぐい去って三階教団の不正事実を探索していた王徐明は、その晚ついに重大事を打明けてきた。

「無尽蔵院で悪事を働いている人物を突き止めました。それも一人でした」

「一人？」

「そうなんです。その男が野望を肥らせて、無尽蔵院へ集った金を某所へ注ぎこんでいたのです」

「その野望とは何ですか」

善導は淡々と聞いている。

「王家の乗っ取り、皇帝の暗殺までそそのかそうとする気配です」

太宗皇帝を亡き者にするとは容易ならぬ陰謀である。

「その先を、私が聞いたとてどうなるもので

もない。私は政事にかかわりたくはないし、貴郎に適切な助言を与えられるとも思えない」

「一つだけ教えて下さい。斐玄証という人はどんな僧なのですか」

「三階僧ではあるが、彼は居士であって僧籍には入っていない。つねに俗服をまとい、俗人として振舞ってきた。信行禪師直系の弟子です。しかし斐玄証はすでに故人ですよ」

「それは承知しています。玄証の子に玄智という者がいます。それが現在の無尽蔵院を一手で牛耳っています」

「おかしいな。斐玄証は身を持つること堅固な人で女性を近づけず、ましてや子供などいはいはずですよ」

「その点は三階教団の内部でも疑うています。実子ではなく、甥か遠縁の者であろうと。ただ本人が実子だと主張していますので……まあその点から言っても臭さいわけですね」

「斐玄証が居士でとおしたのも政事にかかわったからです」

斐玄証を金石碑文は「唐ノ逸民」と紹介する。非僧非俗の在家居士——居士と称したのであらう。

信行禪師の篤実な継承者で、その言行録を精力的にまとめあげて三階教団の基本聖典となした。またその出自は、河東の宰相にまで任ぜられた名門である。出自の關係で隋王朝の功臣、齊国王高潁と親交を結んだ。隋王煬帝が信行禪師のため長安に真寂寺（後の化度寺）を創建したのも彼らの力による。ただし、高潁が煬帝の皇后の不興を買って失脚すると、三階教団にも禁教の弾圧が下された。斐玄証は陋巷に潜伏する。逸民となったのはこの受難期である。

潜伏はしたが、いたずらに逃げまわっていたわけではない。以前にも増して三階教義の宣布をはかった。信徒組織の結束を強化した。錢帛の集積、つまり教団に経済力を培養

したのもこの潜伏期であった。

隋から唐へと政朝が改易した武徳年次、三階教団は再び力強く復調してきた。化度寺に無尽藏院が建てられ、長安の財宝が此処へ集中した。

斐玄証は貞觀八年（六三五）のころ、示寂する。その後継に任ぜられたのは信義や慧ららの三階僧たちだったが、彼らは表面に立てられただけで経済力の中心である無尽藏院の実権は齊王高潁の未亡人賀拔氏だったと言われる。

「禪師は政事にかかわらぬとおっしゃるが、文徳皇后の王子たちには無関心ではおれないでしょう」

王徐明は説得口調になった。

「うむ、皇后は道綽禪師に篤く帰依されたお方だった」

その文徳皇后が薨じたのは貞觀十年（六三七）の六月である。太宗が石壁山玄中寺に道綽を訪ねた直後である。善導はそのあと玄中

寺へ登り、親しく師から浄土教の奥義を学んだわけだが、皇后の篤信ぶり徳操の深さはつねに道緯禪師が話題としているところであった。

太宗と文德皇后との間には三人の王子がいた。長子の恒山王承乾、四子の魏王泰、それと第九子にあたる晋王治である。

もちろん皇太子は長男の恒山王であって、この貞観十五年の時点、彼の幼児は皇太孫の地位まで与えられていたのである。太宗の後継者は文句なく恒山王、と誰もが信じた。

「ところが近ごろ、太宗皇帝のお氣持がぐらつきはじめています。恒山王から魏王の方へ傾こうとしています」

「……」

善導は聞いているのか、いないのか。瞑目したままである。

「原因は恒山王の粗野の振舞いにあると言われています」

すでに天下は統一され、唐王制は文治の時

代へはいつていた。これが恒山王承乾には面白くない。治にいて乱を忘れずではないが、つねに北狄突厥の騎馬衣をまとい、悍馬を乗りまわしている。大がかりな騎馬戦を東宮で催し、落馬して死者が何人も出現するという荒っぽい演武をやつてのける。

太宗はこの「時代ずれ」の皇太子を苦が苦がしく眺めている。文弱だが書物を愛している第四子の魏王泰に心ひかれる昨今であった。機を見るに敏な唐政庁の高官たちの間でもこの両王子をかつぐ派閥が醸成しつつあった。

この中央政界の動揺に連動したのが山東地区、齊王祐である。祐は太宗の第五子だが、生母は文德皇后ではなかった。陰妃と呼ばれ、長安の「京官」に任じている陰弘智の妹であった。余り身分の高くない家柄だったが、陰妃が太宗の王子を出産したことで、実兄も取り立てられたのである。

齊王祐はやはり不満だった。同じ太宗皇帝

を父としながら自分には帝位にチャンスは皆無である。チャンスのないのは陰妃だけではなかった。太宗の後宮で男児を生んだ女性は一十一人を数えるが、その十四人の王子中、太宗は文德皇后の直系だけを重んじた。

これは後のことになるが、長子恒山王、四子魏王が共倒れになって、唐王朝三世の帝は第九子の晋王治へまわってくるのである。高宗である。理由は文德皇后の腹だったからである。

「齊王祐をそそのかしているのが、侯君集という男なのです。先ごろトルファン（高昌）征伐から凱旋してきたばかりです。戦場を駆けめぐってきただけに血の気も多い。だが侯君集以上の曲者が、その女聿である賀蘭楚石です」

王徐明の話を瞑目して聞いていた善導の唇がこのとき、ようやくうごいた。

「賀蘭……」

「ご存じでしょう。齊王高潁の夫人賀拔氏の

娘です。無尽蔵院の実質的院主だった母賀拔氏の後を襲い、現在、その実権を握っています。安西都護の司文少輔斐行儉の愛人とも言われます。彼女が生んだ子が侯君集の女聿となった賀蘭楚石なんです」

「それで斐玄智とは？」

「当然、斐行儉長官の同族につらなる者でしょう。その玄智と賀蘭氏とが惜しみなく金銀を楚石に注ぎこんで、王家の転覆を策しています」

「貴郎の役目は、その実体を突きとめることなのです」

「そうです。賀蘭氏楚石はひんびんと東宮へ出入りし、恒山王と連繫を密にしています。齊の地とこの長安と、同時に反乱が暴発するのではないでしょう」

王徐明の面上はきびしい皺で複雑にゆがんでいた。

(くぐく)

◎読者の皆様へお願い

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努力しています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また誌面においては、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもありますが、誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞふるってご投稿下さい。誌面充実のために、宜しくご協力下さいませ。

- 一、内容 自由（生活の一コマや我感あるいは思うことなどをエッセイ風におま）とめ下さい。
- 一、枚数 四百字用紙五〜八枚程度
- 一、締切 毎月五日

法然上人讃仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

（送料不要）

浄土 五十一巻 九月号

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

昭和六十年八月二十五日 印刷

昭和六十年九月一日 発行

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷所 長谷川印刷 暢

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

発行所 法然上人讃仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒一〇三 振替東京八一八二一八七番

現代仏教情報大事典

現代仏教情報研究会編

仏教界の「現在」が見えてくる情報源!!

【内容】①寺院に関する情報 ↓ 各宗派の本山、有名寺院、海外の開教寺院・名所仏蹟など ②組織に…… ↓ 各宗務庁、都道府県仏教会、学会、宗立学校、仏教青年会、宗教法人事務主管部局、世界仏教徒連盟など ③行事・儀式に…… ↓ 主な本山・有名寺院の行事、冠婚葬祭、④仏教常識に…… ↓ 知っておきたい仏教知識・仏教用語など ⑤寺院経営に…… ↓ 税務対策、多角化、法律問題など ⑥布教に…… ↓ 放送、テレホン相談など ⑦仏教関係業界に…… ↓ マスコミ、葬儀、墓地・霊園、仏具、石材、門前町、精進料理、⑧人物に…… ↓ 現代人物名鑑(僧侶・学者・文化人等約300人)、物故者



【定価二二、〇〇〇円】特別定価一九、〇〇〇円

(昭和61年3月末迄)

絶賛発売中!!

大日本仏教全書

仏書刊行会編 全一六一巻

(※浄土部Ⅱ巻53Ⅰ巻63)

ご希望の巻を分売致します。
分売一冊単価二一、〇〇〇円

織田得能著 仏教大辞典

定評ある内容の正確さと、
語彙の豊富さ。豪華机上版。
B5判・定価一六、〇〇〇円

仏像仏典解説事典

三井鼎史編(昭和新纂国訳
大蔵経解説部一・二巻合本)
代表的な仏像一八点・仏
典五三六点を収録。索引付。
四六判・定価二一、〇〇〇円

梵字大鑑

種智院大学密教学会編
わが国唯一の梵字一大集成
B5判・定価二五、〇〇〇円

- 内容見本無料贈呈・電話またはハガキ(JD係)でお申し込み下さい
- ご注文・お問合わせも直接当会へ ●全国無料配達・代金後払い

☎03(724)8031

名著普及会
基本的名著の
再評価と普及
〒152 東京都目黒区平町1-16-6